

約500戸もある、益城町の仮設住宅団地「テクノ仮設団地」。介護の手伝いをする訪問ボランティアナースの会「キャンナス熊本」代表の山本智恵子さんに、つらいことの多い仮設住宅での暮らしを楽しむ工夫などについて話を聞いた。

尽きることのない仮設住宅での悩み

熊本地震の被災者が入居している熊本県益城町の「テクノ仮設団地」。約500世帯が住む県内最大の仮設団地だが、住民が多い分、生活の悩みも多という。団地住民の支援活動をしている訪問ボランティアナースの会「キャンナス熊本」の山本智恵子さんに、集団生活について話を聞いた。

熊本地震の被災者が入居している熊本県益城町の「テクノ仮設団地」。約500世帯が住む県内最大の仮設団地だが、住民が多い分、生活の悩みも多という。団地住民の支援活動をしている訪問ボランティアナースの会「キャンナス熊本」の山本智恵子さんに、集団生活について話を聞いた。

テクノという名前は、工業団地「テクノリサーチパーク」の一部を借りて造られたから。仮設住宅に入ってすぐは「部屋がせまい」「知らない人ばかり……」という悩みが多いようだったが、それは住んでいるうちにだんだん慣れてきて解決されてきた。今、被災者は、自宅を自力で再建できる人と再建できない人に二極化してきたという。

テクノという名前は、工業団地「テクノリサーチパーク」の一部を借りて造られたから。仮設住宅に入ってすぐは「部屋がせまい」「知らない人ばかり……」という悩みが多いようだったが、それは住んでいるうちにだんだん慣れてきて解決されてきた。今、被災者は、自宅を自力で再建できる人と再建できない人に二極化してきたという。

人と人とのつながりの大切さ

熊本県益城町の「テクノ仮設団地」では、ボランティア団体「キャンナス熊本」が、約500世帯の住民といっしょに住みやすい環境づくりに知恵をしばっている。力を入れてるのが、人と人とのつながりだ。取材で特に心に残ったのは、近所付き合いが苦手という独り暮らしの男性のために、月に1回男性限定の飲み会を始め

たこと。交流だけが目的でなく、参加した人が、アルコール依存症などになつていないかをチェックし、男性同士のコミュニケーションティーづくりにつなげようとしている。3年たった今でも仮設住宅の人たちの健康チェックをしている。自治会の主催で、秋に運動会を開いており、積極的に参加している人も増えてきた。生活していく上で、



植田美奈 記者

所で新しいコミュニティがつくれるかどうかの不安や、孤独感に対して悩んでいるという。再建できない人は、再建できる人に「取り残された」と感じて妬みを持ってしまふことがある。私はお互いが励まし合えばいいと思う。そうすれば再建した人も「家

り残された」と感じて妬みを持ってしまふことがある。私はお互いが励まし合えばいいと思う。そうすれば再建した人も「家



田口心春 記者

日用品や食料は欠かせない。そこで仮設住宅の敷地内に、7店舗が並ぶ商店街ができた。遠くの町に行かなくても、便利に買い物ができるようになった。私の住む岐阜県白川村には、「結」という言葉がある。人と人との支え合いのことだ。昔の白川

村は、一家族では、到底やり切れない田んぼの数だったので、助け合ってたつたので、助け合ってたつたので、助け合ってたつたので、助け合



山本智恵子さん



団地の中心にあり、「みんなの家」と呼ばれている集会所で取材をした。熊本地震発生から2年以上経ったいまも、仮設住宅では多くの人が過ごしている。団地には「益城テクノ笑店街な7な」という商店街やスーパーもあり、生活に必要な物がそろえてあった。

